

講演会

日時：2012年3月17日（土）
場所：広島大学教育学部第1会議室

演題「負けてたまるか」
講師 宮原 満男

こんにちは。

高いところへ奉られまして、今から20年くらい前に学校の教員をやっていましたが、現在はグランドゴルフや老人クラブの世話をしております。そういったことをやって、私は現在83歳です。広大の1期生ということで、もう今から何十年前に広大の附属高校のところに、教養科目というものを受ける、教養部というものがあります。そこでそれからどうも運が悪くて、私は広大の学生の所在が3回変わりました。最初は今言った、附属高校があるところの皆実分校、それから今度、呉線に安浦というところがあります。そこに、昔軍隊の海兵団があったんです。そこに、大きな木造の建物があり、その安浦分校というところに行きました。そこで1年くらいおって、今度は福山分校というところへ行きました。これは全部軍隊の施設で、安浦の方も木造の大きな2階建てで、体育館は教室の中のしきりをつぶして、グランドは広場です。そこへ自分らが、石灰の代わりに槍の先に砂をつけて200メートルのトラックを書くというような時代でした。そこへ8ヶ月くらいおりましたら、福山分校ができたからそこへ変われということで、これも福山師団という軍隊のあとで、そこは、全部平屋の兵舎でしたが、さすがに明治頃からできた福山師団ですから建物自体は立派なものでした。そこで勉強したというか住んだというか、そういう時代でした。だから実際に腰を落ち着けてやったということはありませんでした。

広大入学前に私は広島逓信局、今の郵政局ですか、の事務員をしており毎日毎日人のお金やいろいろな封筒貼りとをするようなことばかりしておりました。家の近くに今の筑波大学の前身の国立東京体育専門学校の卒業生の方が「あんたよう駈けるけえ」、まあ多少ですね、地域で足が速かったわけですよ、「あんた足が速いんじゃないけえ、駅伝もあるけえ、東京体専にいつてみんか」という話がありました。私はすぐ行くと言うてもですね、やっぱりこれ（お金）があそこですから要るわけですよ。昭和22年、23年頃ですから食うや食わずの時期でもあったんですが。まあとにかくいづれにしても親に頼んで行きました。上京すると、全国から集まって来ておりました。多少広島の方で足がちょっと速かったので駅伝競走部に入りました。先ほどちょっと言いました東京箱根駅伝の山下りを担当いたしました。体専へ行った時の唯一の宝で、今考えてみると箱根町からちょうど峠まで約5キロありますが、そこから坂おとしに10何キロ、それから平地がやっぱり3キロくらいあり、合計24キロぐらいを1時間24分25秒、まだ

忘れもしませんが、区間3位で区間賞に25秒負けました。現在は、59分台というふうになっております。まあ考えてみればあれから約67・8年たっているわけですからそれだけの進歩はあるでしょう。当時は靴。昔は靴がなかったもんですから、マラソン足袋と言ったんです。普通の白い女性がはく白足袋の裏に、ホース。(水出すホース)それを足の裏のように自分で切って、それを縫って、造っていました。まあそういう時代で、今頃は近代的ですばらしい靴を作っておりますが、まあそういう戦後の時代でした。ちょうどその頃親の方から広大に体育科というのできるということを知らせてくれた訳です。それがちょうど昭和24年ですから、東京はお金がかかりますし、親も貧乏しておりましたから広島に体育科ができるから帰ってこいと、帰ってこいと行っても受験があるんですが、帰って広大の1期生ということでそのときは13人ぐらいおりました。この近くでは、佐藤裕さんというのが神辺の方の出身で、昨年亡くなられました。1期生が9人ぐらいに減ったわけです。この体育の専攻ということで、広島市立基町高校に勤めたのですが、母校の方から広島大学の方に採用されて、後輩の指導をしたということでもあります。

今日はこの”負けてたまるか”という題で、これは何も陸上競技に関わらず、バレーボールでもとにかく”負けてたまるか”こういうことで話をして欲しいということでありました。しかし戦時中ですから、私が育ったのは。それが終戦になって、日本の国が全部疲弊して、実際に西条の方の農家の大きな田んぼの排水作業、環境排水というのを皆さんご存じだと思います。ずっと水を掘って、それに立ち木の本を埋めて、その上に土をかぶせて。ようするに、水はけをよくして、米をたくさん取るという、そういうようなことが、戦後ずっとあったわけです。そういうようなことも私らはやりました。とにかく何かについて、その当時は、みんな不服をいわずやりました。ましてや、楽しいスポーツなんかというのは、そのころにはありませんでしたので、金もかからず、時間も取らず、ようするに、このぼろ靴が一足あれば、体一つで走るというその成りの果てが現在に至ったわけでありました。そのように、今日を過ごしたわけでありました。

本論へ入りますと、まず、ちょうど中学校の2年か3年頃に国家総動員法というのが始まりました。今の人には平和な今ですから、そういうことが全然関係ありませんけれども、国家総動員法というのは学校が全部、全市そして全国の兵器とかいろいろなものを作るところに、軍事産業へ強制的に行かされたわけです。わたしは、三菱造船所の広島造船所へ配属になって、そこで仕事をさせられたわけです。何をしたかということと大きな巡洋艦、巡洋艦って分かりますね。いわゆる戦艦の次に大きい艦ですよ。それにボイラー、今は全部ディーゼルエンジンでいきますが、その当時はやかんに湯を入れ、ボコボコいわゆる蒸気ですね、その蒸気でその船を動かしていたわけです。その蒸気釜を作っておりました。三菱の造船所に配置されて、明けても暮れてもその釜作りを、2年ばかりやりました。それから戦雲が急になり、その当時はとにかく強い兵隊、強い兵器という戦争の最中ですから優雅に、「ちょっとあそこへ行って遠足しよう。」とか「ちょっとデートしよう」とかということではなく、工場に朝の七時半から夕方の五時半までちょ

うど10時間拘束されていました。私は安芸区の瀬野から通っていましたから、朝5時に起きて5時50分の汽車に乗って広島駅まで行って、そこから三菱まで行く、そういうことが2年ほど続きました。しかし、日本はこのような状況ですから、文句を言ったら当時は国賊でした。まあそういうものはおりませんでしたけれども。

そして例の8月の6日、この日はですね、全くの快晴でした。同じように家を出たんですがちょうど、汽車が30分ほど遅れたわけです。広島駅から電車で観音町というところまで行くんですが、今では電鉄の電車も速いですがあのころのは、電気を節電するために相生橋の登りなんかは、歩く方が速いくらいの状態でした。それで30分ほど遅れていたもんですから観音町から今度はバスも何もありませんから三菱の造船所まで歩くわけです。これが距離が約4キロぐらいありますから、ちょうど正門入って50メートルぐらい行ったときに、バーンと頭の後ろから殴られたような熱さを感じたわけです。振り向いて空を見上げたら、広島市の上空に例の原爆が炸裂して、まさにきのこ雲があがっておる時でした。「これは何じゃろうか。新型爆弾？」そのときにすぐ新型爆弾ということは分かりました。しかし原子ということもみんな知らない時代ですから、それが原子爆弾ということはわかりません。あっという間に8000メートルくらいまで煙が上がっていくわけです。それを見ておったら、その三菱の造船所から「動員学徒はすぐ退去しなさい」ということで、いわゆる家へ帰れということです。私は瀬野の方ですから本来は三菱の造船所から言えば江波を通過して鷹野橋を通過して海田へ帰るのが普通のルートですけどももうすでに、たぶん途中は通れないだろうと思いました。実質通れなかったんですが、それでこれは大変だということで反対側。いわゆる宮島の方側にですね、帰ろうとしました。しかし、ちょうど庚午橋、今は8車線の立派な大きな橋がありますが、その当時は、松の木の丸太が4本ほど50、60センチ間隔でかすがいでとめてある、400メートルくらいの橋でした。だからぐらぐら動くわけです。それを下は黒い水が流れておりますからとにかく一心不乱と言うことです。400メートルほど平均台の上を通るように橋を渡りました。なかには1人2人落ちたかもしれません。橋を渡ったとたんに、黒い雨というものがよくでると思いますが、その黒い雨というものが猛烈にザーと降り出しました。傘とかないですから、もうそのまま歩いて草津の方から今の西広島の己斐の駅の方まで歩きました。そのころになって穴が掘ってある蓋のない防空壕があり、それに大雨が降って水がたまっておりました。その頃にちょうどブーンと飛行機が原爆を落とした後の広島市の状況を撮影しにきました。4、5人同級生がおったんですが、どうするかと言いますと、ちょっとかがむ感じで水が溜まっているところへ、おそらく3分か4分ぐらいいました。水が溜まっておるもんですから、「おい、もう死んでもええけん、歩こうや」ということになって、そこから出てずっと歩きました。今で言いましたら崇徳高校のところに大芝公園という大きな公園があります。防空壕から大芝公園まで三篠橋という橋があるんですが、もう全部家が倒れて燃えておりましたから通れないわけです。それから、山陽本線の鉄橋の上では貨物列車が爆風で倒れてそれに火がついて燃えよるので、どうするかと言うことで崇徳高校の近くの大芝公園

から着の身着のまま川の中を歩いて対岸の牛田に工兵隊という軍隊の施設まで水の中を歩いて渡ったわけです。わたってそれからすぐ東練兵場がありますがそこまで行く間にカンカン照りになり、すぐ乾いてしまうというようなことがありました。その東練兵場というのは今は二葉の里というビルが立っておりますが当時は広い草原の、軍隊の練兵場だったんです。そこを通過して海田市の駅まで歩きました。歩きましたといっても濡れたり飯を食うてないですからくたびれちゃおったんですが、要するにそこまで(歩きました)。ようやく海田市の駅に行きましたら、ドアが壊れたり窓のない貨車が臨時に西条まで出るから「乗ってもよろしい」ということで帰りました。ちょうど私は瀬野の駅なものですから瀬野の駅を降りたら割烹着のおばさんなんか、一生懸命炊き出しに大きな釜にご飯を炊いていました。「これは何をしてるんだろう…ああこれは広島市内に炊き出しで持って行くんじゃろう」そこで初めて気が付きました。原爆経験というのはそういうことで、私は市内の方を通っておりますので状況は分かりませんでした。しかし「次の日に行かなければ日本は負ける。」兵器産業の三菱の造船所ですからね。だから僕がひとりでも行かんといけんととにかくそう思ったんです。で、行こうとして行ったら、広島駅から交通機関が何もないですから歩いていったら、守衛さんが「あんた、学生さん？ここまで来て気の毒だが昨日から三菱が休みになっとる」「おじさん、せっかくここまで来たんじゃないから」「あんた来ても工場の中は空で「役にたたんのじゃけん帰れ」「そうですか」といって今度どうして帰ろうかと考えました。私は、物見高い男ですから、せっかく鷹野橋を通って斜めに広島駅まで帰ったんじゃないああまり意味のないと思って、それが愚の骨頂で、原爆症があるとは夢にも知りませんから、今の加古町のところに広島県庁があったんです。ちょうど相生橋のT字形の橋の下の方が県庁やら広島で、相生橋自体は曲がって電車が通れんぐらいに穴があいたり線路がでこぼこになっていました。しばらくして電鉄が直して通ったんですが要するに浮き上がって下が見えるような状態でした。そこから今度は広島駅の方へ昔、招魂社と言って、軍隊の人を祀るところがあったんですがそこに大きな鳥居がありました。今は石の鳥居が移設してありますがその当時、あそこの中心地でも鳥居だけは倒れずにあったんですよ。そのあたりの状況を言いますと道という道は全部焼けたようなトタンがかけてありそれは全部人間が倒れているんです。原爆を受けて倒れた人間を処理する人がいないわけです。市内全部がそうなおるわけですから一人で担いで行くわけにもいきません。また、熱いですから水の中に入って成仏されたというような人が全部で10何万人というのが現実でした。そういう意味では今の100メートル道路、平和公園の通りに出てくる比治山から己斐まで、ちょうどそのときに広島市が防火地帯として、火災を防ぐために強制的に100メートルほど人家をどけたんです。それが今の平和大通りになっている訳であります。そういうような広島市の現状がありました。

まあ考えてみたら、ほんとに僕らは、学校がつぶれたものですから、土橋の今もある光道会館というところで、授業が再開されたんですが、なんせ、窓ガラスがない、その代わりに、米軍配給の粉ミルクの紙のファイバーを窓ガラスの代わりにとめてあったよ

うなところですから、まともな授業というのができません。そういうような時代でありました。しかも、私は勉強が嫌いなものですから、熱心にやったことは、走ることです。そのことが、現在につながっています。その頃近所に、附属高校の先生が1人だけおられて、筑波大学の前身の東京体育専門学校の卒業生でした。私に来いよと、言って頂いたので、体育の道へ入りました。動機は、非常に単純なものですけれども、親がよく、その頃貧乏な時に東京の方にやってくれたと思うんです。まあ今は新幹線で行けますが、昔は熱海まで、行って、熱海からは電化、汽車で顔が真っ黒になるような時代でした。国立の東京体育専門学校というのは昔の文部省の体育研究所という施設が体育専門学校になったわけです。したがって施設そのものの備品は官給品で超一流でした。そこで「おまえ、広島から来てちょっと足が速いけん、練習せえ。」ということで走ったのが、箱根駅伝の山下りの6区でした。2日目のスタートですよ。それに推薦されまして、これはやっぱり嬉しかったですね。嬉しいと同時にそれこそ火になって練習しました。距離が約24キロぐらいあるわけですから箱根の先輩のところへ合宿しました。合宿といっても1人ですから道中にバス、車、人間、馬、なにもいない、天下の箱根の山ですからそれこそコースにしても十分なところですよ。そこで箱根から下って宮ノ下というのがちょうど真ん中なんですけどそこまで行って往復をして練習という、そして先輩の家に泊めてもらいました。駅伝競走当日は7度ぐらいの朝で富士山がすぐそこに見えました。広島からわざわざ親がかけつけてくれて、ここまでしてくれたのだからちょっと頑張らなければと、思い切り山下りを走りました。先ほどにも言いましたように1時間24分25秒、今は59分ぐらいなんですけどその当時では区間3位、区間賞の人と25秒違っただけなんです。そのような経験があって、その年に昭和24年に学制の大改革、小学校6年、中学校3年、高校3年、大学4年という6・3・3制ができました。

以後それからは大変に入りました。今の皆実町の附属高校のところに行き、それから今度安浦というところに海兵団があってそこへ変わって、そこから又福山分校にかわりました。普通の人には千田町の校舎で卒業したと思いますがそのような色々な道を経て今日があるわけです。しかし幸いなことに自分で一生懸命走って一生懸命やったことがこの色々なマネジメントになり、高等学校に就職して後に広島の方へ、母校に帰ってこいということになり、現在に至りました。それから私学にもちょっと行ったんですが、人間というものとはとにかく、力を抜かずに一生懸命やっておればどこかで誰かが拾ってくれる、言葉が悪いですが人生の中で考えてみればですね、私なんかはほんと実際には旧制の中学校での授業は殆どなしで、1年の時だけ授業、2年3年4年は三菱の造船所へ勤労働員、終戦、5年生になったらすぐ卒業ということで、人間というものは条件がいくら変わっても自分が一生懸命やっていたらいつかはまた拾ってくれると言いますが、自らがそういう風に頑張っている時に誰かが見てくれているもので、高校教員12年目に「おまえ広大こんか」というような話が来たときは天にも昇るような気持ちでした。それが今日につながっているようなことであります。

自分がなぜこの職務に関わったかという戦時中ですが呉と広島の間を、軍都連絡少

年駅伝というのが中国新聞でやっていました。そのときに私は、坂と小屋浦の間の4キロを選手として走り、区間賞を取りました。現在あるのはそのたった一つの区間賞がきっかけになって今日につながったと思います。いくら努力していくら勉強してる人でもそういう運に恵まれない人も世の中にはたくさんいます。私のようにたった一つの区間賞で現在があるように、人間という者は裏表なしに一生懸命やっていれば、どこかで誰かが見てくれているわけです。世の中の人がそれを認めてくれるというのが私の持論なんです。偉そうなことを言うようですが、そういう風に日頃から思っただけでいいです。

今日は、橋原先生から始まって西村先生からも、「わしが話をしても皆さんの役にたつようなことはようせん」とは言ったのですが「ええけん、表彰じゃないけん来い」ということであつたので今日来ました。まことに学のある内容の話というのは大体ここ(頭)がないので偉そうなことをこのような場でいうとすぐ化けの皮が剥がれます。しかし、ただひとつ何事にもひとつのですね、バレーボールでいえばスパイクにしてもレシーブにしてもそれだけにですね、陸上でいえば走ること、しかも私は長距離でしたがそういう風なことで一生懸命やって、日本一になれるとはちょっと無理ですが、しかしそれなりにやっておればどこかで必ず誰かが見ているものです。またはそういう時代が巡ってまいりますので皆さん方はそれをよく考えていただいてしっかり頑張ってくださいと思います。やっぱりええ加減なことをしてはだめです。一生懸命、同じ走っても、ちょうど僕が監督しとったときに、中国駅伝競走があり、福山から広島までの100kmビリから2番目でした。一番ビリは三原体協というのがビリでした。その前が広島大学でした。国道2号線を福山から広島まで広大という名前をつけてビリじゃなくても走ったというのが、あのとき出た学生諸君は、ビリから2番目じゃったけど、頑張ったんだという一生の宝になると思います。与えられたそういうことについて本当に一生懸命やれば、自分なりにそういうものは人に見てもらふためとか、どうか人に奉られるためにするんじゃないに自分を磨くということだと思ふんです。ここは全部バレーの人ですからひととき大きい人の中で目を皿のようにして考えてやっておられますが、駅伝競走というのは、あるいはマラソンというのは、人気になってますが、あの長い2時間ぐらいの間に何を考えて走るかということで、僕は何遍も言いましたがただたわいのない、今日帰ったら何々を食べようかなどを考えて走りました。しかし皆さん方も競技スポーツで得たなによりも人間関係、特にバレーボールなんかは人間関係、陸上なんかは個人プレーと言いましてもやはり広島大学というゼッケンをつけて走る場合、駅伝のようにタスキを渡す時、これは必死です。一番、重荷に責任を感じるのはやはり駅伝競走です。たすき、たかがたすきと言いますがこれを次の人間に渡すのは死ぬる思いで渡すんです。今度は次の者がその次の者へ一本のたすきというのがいかに大事なものであるかというのが駅伝の場合にはあります。特に今日呼んでいただきましたバレーボールの皆様方、先生方には何を言って良いか分かりませんが、今まで私がしゃべったことの中に1つくらいは得るものがあるだろうと思いますのでそれを糧にして明日からのトレーニングに頑張っていって欲しいと思います。私も今年の正月の時に今年度は、先ほどもちょっと

触れました、2000キロは走りたいと思っておりますが何しろ83を過ぎておりますのでいくかどうか、自分の力はもう分かっておりますからきついときにはさっと思い切ってやめるといようにして西村先生もいろいろやっておられますが、まあそのように何か一つ決めて頑張りたいと思います。今日はせっかくの貴重なお時間を与えていただきましてありがとうございました。何を言ったかようわかりませんが一つくらい良いことがあったな、よく頑張った箱根駅伝まあそれくらいでも良いですからちょっと心に留めていただければと思います。どうもありがとうございました。

<質疑応答>

軍神：63期の軍神と申します。貴重なお話をありがとうございました。人間というのはなにがきっかけになるか分からないという言葉が印象的だったのですが、先生の中で区間賞が大きなきっかけだったというお話だったのですが、今現在の先生の中で、どんな場面でそれを一番実感されているのかというのをお聞きしたいのですが。

宮原先生：はい。一つの、区間賞というのは少年駅伝の時の時間で、14分7秒でした。それで駅伝競走の時区間賞でした。自分の今までの練習の中で、人が1000メートル走るんだったら僕は1500メートル走ろう。2000メートルだったら2500メートル走ろう。というふうに、常に人よりも多く、同じようにやったら同じですから、人より少し多く負荷していけば良いんじゃないかと思います。このことが始まりになったわけです。広大の陸上部の駅伝はあんまり強くないのにと、バレー部の方は思っとなるかもしれませんが、創設期から14、5年までは中四国駅伝では、ダントツに全部1番だったんです。今は、大体4番か5番ぐらいじゃろと思うんです。だから、人間はよく「継続は力なり」と言いますが、なかなか全部が全部ええ具合にいくわけじゃありませんので、今考えておることはそんなことを考えております。こちらで話を終わります。

軍神：ありがとうございました。

阿部（陸上部）：失礼します。陸上競技部1年生の阿部と申します。今回はこのような貴重なお話を聞かせて頂き、ありがとうございました。僕も先生と同じ陸上競技をやっているんですけど、先生は広島で足が速くて、東京の方に駅伝をしにいかれたという話をされていたのですが、あえて苦しい生活に、東京に行くということは苦しい生活になるということが分かっていたと思うんですけど、そういう道を選ばれたきっかけというものがなにかあれば教えて頂きたいと思います。

宮原先生：私は近くに、定末さんという東京体育専門学校（現筑波大）出身の方が附属の先生をしておられました。そこそこ走るというのが近所ですから分かっていますから、「あんた東京に行ったらどうかなあ」という話を聞いたわけです。

そのころにはいくら国立の学校といっても、新聞で広告しとるわけではあり
ませんし、その卒業生の方が、言ってくれたわけです。親にこうこうだ、
どうじゃろうか。となったわけです。親もですね、瀬野の方の田舎の百姓の
貧乏な家ですから、東京へ行かすと言うたら、大変じゃということになった
ろうと思うんですが、オーバーで言うたら、親族会議を開いて、どうするか
ということで、官立東京体育専門学校へ行行ったわけです。しかし、考えてみ
れば、そこへ行った時にですね、広島出身で、今年2月に亡くなられました
、川村先生というのが、その卒業生でして、その先生が、お前よく来た
のおというところからですね、広大の教員になったし、それから広島陸協の
役員にもなり、社会的な奉仕ができるようにその先輩がして下さったわけ
です。だから、皆さん方もですね、やっぱり先輩・後輩というのがですね、た
だ単に上級生とか下級生というのでなしに非常に大きな意味を持っておりま
すので、是非今おられる人は後輩にも先輩にも色々アドバイスをしてですね、
それが必ず自分のためにかえってくると、こういう風に思います。以上です。

阿部（陸上部）：ありがとうございます。

宮原先生：バレー部の方々がですね、このように熱心な会をお開きになるというのは、
私が陸上競技部のずっと部長やら顧問をやっておりましたので、今度陸上部
のOB会があった時にはですね、お前らしゃんとせえ！バレーボールの人間
はこうしとるぞ。何をぼやぼやしとるんや。規模からいっても、陸上は人数
から言ってもですね、そりゃすごい人数になっていますから、いっぺん、ち
ょっとバレー部のところに行ってから、頭下げて色々教えてもらえという
つもりです。ありがとうございます。

宮本先生：先生もう一つだけ教えて下さい。あの、僕は今年還暦を迎えました。先生の
年までいくのにあと23年生きなればなりません。でも負けちゃられない
から、負けてたまるかで、あと40年は生きていたいと思っているのですが、先
生を超えるぐらいに頑張っていけるための秘訣はおそらく先生のその笑顔で
ある、しょっぱな先生覚えてられますか？僕大学広大通った時に、基町高校
卒業です。って先生に挨拶行った時にお前基町か、わしも基町の卒業生だっ
て先生おっしゃった。で、その時の笑顔から現在に至るまでに先生に会うご
とに先生笑顔でおられます。おそらくその笑顔の中に今、たぶん原爆症でお
られると思うんですけども、そういう肉体的にもダメージ受けながら、現
在83歳で、姿勢もすごく良いし、今みたいにしっかり力弁もできるし、そ
の秘訣ってのは多分、笑顔で常におられるというところにあると思うんです
けれども、そういったことも含めて、ここまで元気でられる秘訣を教えて
いただいて、先生に負けない私になりたいと思いますが、よろしく願いま
す。

宮原先生：彼が言いましたように、私は昭和28年に卒業した時に、すぐ市内の基町高

校という所に教員で入ったわけです。だから基町のことは詳しいわけですが、しかし何様、新卒で高等学校の教員になって、基町へ行ってすぐ2年生の担任をして、それから12年ほどずっと基町におったんですが、その間全部ホームルームの担任をしました。これはですね、自分でも本来はこういうことを言っは悪いんですが、体育の教員がホームルームの…皆さんの出身校を考えてみてください。体育の先生がホームルームの担任をずっと、全部、12年おりましたが、最初行った時に2年、ということであんまりようわからんのですが、そのかわり、ずっと何回かはですね、家庭訪問というのは今頃は車ですが、あの頃は自転車でしたが、一軒一軒全部まわりました。そういうことをずっと記録しておりましたから、校長がですね、「お前ようやとるの。」で、7、8年経った時に、校長の娘さんが今度自分のクラスになった。その娘さんは今、アメリカの方へ行ってますが、人間というものは、私が思う限り、陰日向なく、たとえそれがこんなことやとってもお前なんになる？ というようなことでも、石の上にも3年というような言葉がありますが、それを何年も続けてやっていけば、いつかどっかで芽を吹く。あるいは花も咲くと、そういう風な言葉があります。皆さん方も、是非そのようにして欲しい。この83歳の中老の人間が言うたとそう思ってください。まだ私自身は、皆さん方とそう違わん若さを、若いと思っとるんですが、ま、どう見ても初老に間違いない…そう考えてみるとあと6年くらいで90歳になる。考えてみてみなさい。昔、85、6～90歳といったらですね、もうこれぞおじいさん、おばあさんだったわけですから、今頃では背筋が伸びて、我慢してこうやとるわけではないんです。自然体なんです、そのように、幸いなことに私がこうなったのは、やっぱり体育の教員をしておりましたから、普通の一般のおじいさん、おばあさんというような人よりもですね、歳は違うと思うんですが、やっぱり日常生活をそれより規則正しく、ピシッとしてやればですね、こうやって、ここで皆さん方に、君たちは若さを保って、元気にやって下さい！とこうやってやったんじゃ、なにをこのくそじい、お前背中は曲がとるやないかという風になります、もうふんぞり返とるわけじゃないんですが、それが自然体であればですね、是非皆さん方一つ努力をしてください。何もふんぞり返ることはないんですが、規則正しい生活をすればですね、きっと長く80、90歳まではいくんじゃないかと思えます。いらんこと言いました。失礼しました。

宮本先生：ありがとうございました。